



Title	日本における精神障害当事者のアイデンティティの揺らぎ——インタビュー・ナラティブ分析から見えてくる他者との関係性——
Author(s)	周, 氷竹
Citation	大阪大学, 2025, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/101527
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏名(周氷竹)	
論文題名	日本における精神障害当事者のアイデンティティの揺らぎ ——インタビュー・ナラティブ分析から見えてくる他者との関係性——
論文内容の要旨	
<p>1. 目的とリサーチ・クエスチョン (RQ)</p> <p>本研究は、精神障害者と非障害者の間に存在する相互理解の欠如という現状を背景に進められている。一般的に「差別してはいけない」という社会的コンセンサスは広く共有されているものの、マイクロアグレッショングのように無意識のうちに差別が行われる場合も少なくない。こうした状況を踏まえ、障害当事者の日常的な言語実践において何が行われているのか、また、これらの言語実践が社会文化的構造とどのように関わり合い、その構造をいかに再生産しているのかを明らかにすることが重要である。</p> <p>この問題を考察するため、まず、相互行為の場（今・ここ）で用いられた言語使用を分析する。次に、いかなるアイデンティティが構築されるかを明らかにする。さらに、精神障害者当事者のアイデンティティ構築において、社会的規範が関与していることを作業仮説とし、アイデンティティ構築の過程を分析する。それにより、いかなる社会的規範が関与し、その規範がどのように再生産されるかを明らかにする。これが本研究の研究課題である。そこで、本研究は、精神障害者と非障害者の相互理解を促進し、両者の架け橋となること、また精神障害者と非障害者を巻き込んで機能する社会的規範を問い合わせ直すことを最終的な目標とする。</p> <p>本研究の分析対象となるデータは、筆者が2019年11月から2022年11月にかけて実施したインタビューによって収集したものである。対象は、精神障害（統合失調症、うつ病、双極性障害など）を抱えながら日本で生活する13名の当事者であり、フォローアップインタビューを含め、計16回のインタビューを実施した。</p> <p>本研究の研究課題に沿って、以下の3つのリサーチ・クエスチョン（以下、RQと略）を設定する。</p> <p>RQ①：アイデンティティ構築に関与する言語使用はいかなるものであるか。</p> <p>RQ②：いかなるアイデンティティが構築されるか。</p> <p>RQ③：精神障害に関するいかなる社会的規範が関与し、どのように再生産され、または変容しているか。</p> <p>以上3つのRQに沿って、当事者の立ち位置を捉える手がかりを示し、障害に関する規範の輪郭を炙り出す。</p> <p>2. 先行研究及び問題点</p> <p>精神障害当事者の社会運動を調査した伊東（2021）は、障害学の分野の先行研究を検討し、障害学の主な研究対象が身体障害者の運動であつてきることを指摘している。すなわち障害の種類から見れば、昨今の障害研究は身体障害研究を偏重する傾向があるといえる。その数少ない、精神障害に関する質的研究には、以下の問題点があると考えられる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 障害研究全体の中で、私的領域・精神障害を取り扱う研究が比較的少ない ② 相互行為の視点を持った研究が少ない ③ ナラティブとアイデンティティの捉え方が限定的でありナラティブのモデル化の傾向が強い <p>3. 理論的枠組み</p> <p>まず、帰属意識と関連させつつ、他者化という概念を見ていく。Gillespie（2006）は、自己を強化し守ることで、内集団と外集団、自己と他者を差異化する傾向を「他者化（othering）」としている。人がある集団に対して帰属意識を持つ時、アイデンティファイ（identify）という現象が起き、自己をその集団の一員みなす。それと同時に、他者化（othering）が起きるという。岸（2013）は沖縄から本土へ就職した人たちの語りを分析するなかで、社会の権力的な同化主義や同化政策の性質に注目する。集団単位の同化主義的な出会い自体が「私は誰だ？」と問う一因となり、同化圧力は他者性を生む機能を持つと指摘している。</p> <p>Gillespie（2006）は、人は意識的に人称代名詞（例えば、we vs. they, us vs. them）を使い分けることで、自分自身を位置づけ、また自己と他者に対する捉え方を表すと述べている。本研究でも人称代名詞を含む</p>	

言語的な特徴に注目し、精神障害当事者がいかに語りを通して帰属意識を表したり、他者化を遂行したりする過程に着目する。

次に、ナラティブを分析する概念として、スマール・ストーリー (small story) を提示する。スマール・ストーリーは非典型的な物語の形で、例としては現在進行中の出来事を語ると、未来や仮定の出来事、ほのめかし、語りを据え置くこと、語ることを拒否することなどが挙げられる（イエルガコポロ2013:24）。仮想のシナリオ (hypothetical scenario) は、ナラティブ分析の対象となりうる典型的なスマール・ストーリーである。仮想のシナリオは現実世界の出来事ではなく、実際に起こっていない出来事のシナリオに関する語りである (Georgakopoulou2001)。本研究はスマール・ストーリー、仮想のシナリオなどのナラティブ研究の概念を用いて分析を行う。

最後に、アイデンティティについて述べる。アイデンティティという、人に関わる要素と言語のインターフェイスの考察は、言語と社会の直接的な結びつきを明るみに出すことができる（嶋田・三上2022）。そのため、アイデンティティとナラティブが密接に関連していることは、談話分析に関する研究の前提となっているようである (Giddens (1991)、Zimmerman (1998)、Georgakopoulou (2006)、De Fina and Georgakopoulou (2012)などを参照)。Georgakopoulou (2006) はZimmerman (1998) のアイデンティティに対する捉え方を基に、「「大きな」アイデンティティ（相互行為の場を超えて、外因的で「持ち運び可能な」

(transportable) アイデンティティ）と、相互行為上の役割といった「小さな」アイデンティティ（語られる特定の場に固有の、内発的なアイデンティティ）にアイデンティティを分けている。さらに「大きな」アイデンティティを明らかにするためには、語りに内在された「小さな」アイデンティティを分析することが最善の方策であると論じている。本研究でも、語りにおける「小さな」アイデンティティ（位置づけ）を分析することで、より大きなアイデンティティの考察につなげることができるものと想定する。

本研究では、会話参与者的アイデンティティ構築をまとめる理論的枠組みとして、Bamberg (2011, 2012) が提唱する「3つのジレンマ」理論を採用している（村田2020を参照）。この3つのジレンマは以下の通りである。まず、①「同質性・異質性」 (sameness/difference) とは、会話参与者が自己を他者と同じ立場に置くか、異なる立場に置くかという自己の位置づけを示す。次に、②「能動性・受動性」 (agency/passivity) とは、会話参与者が主体的な立場を取るか、受動的な立場を取るかという自己の表出を示す。そして、③「連續性・非連續性」 (constancy/change) とは、会話参与者が現在の自分と過去の自分との一貫性を保持するか、あるいは新たな自己を強調するかという自己の構築を指す。これら3つのジレンマを検証することで、会話参与者がどのようにして多様な側面からアイデンティティを構築しているかを包括的に捉えることが可能となる。

4. 分析結果

RQ①についての考察を述べる。語り全体の分析を通じて、語り手は、有標な言語表現やスマール・ストーリー、「声」（内在化された声や構築された対話）の引用、反復、直示、前提、否定など、言語的および非言語的な多様な手段を駆使し、アイデンティティを構築しながら社会的規範と交渉している。

RQ②についての考察を述べる。本考察では、精神障害当事者が多様な関係性を通じてどのように多層的かつ流動的なアイデンティティを構築しているかを、Bamberg (2011, 2012) の「3つのジレンマ」（同質性・異質性、能動性・受動性、連續性・非連續性）に基づいて分析した。その結果、精神障害当事者は関係性ごとに異なるプロセスを通じてアイデンティティを形成していることが明らかになった。

まず、精神障害当事者間では、共感や仲間意識を通じて共通の自己像を形成する一方で、他者との差異を意識することで自己を相対的に位置づけている。また、過去からの変化や新たな立場を通じて自己を再構築し、社会的使命感を持つ積極的な自己像と、排除への恐れを抱く受動的な自己像が交錯する様子も観察された。

次に、家族や専門職との関係では、価値観や立場の違いを通じて疎外感を表現しつつ、支援者として能動的な役割を果しながらも、社会的制約による葛藤を経験している。一貫した自己像と、状況に応じて柔軟に変化するアイデンティティが共存している点も特徴的である。

さらに、インタビュアーとの相互作用においては、共通性の強調がコミュニケーションを阻害する場合がある一方で、相手の立場を尊重しながら対話を進めることで円滑な関係が構築されるプロセスも確認された。

これらの分析を通じて、精神障害当事者は、多様な関係性の中で同質性と異質性、能動性と受動性、連續性と非連續性を調整しながら柔軟にアイデンティティを形成していることが明らかとなった。このプロセスは、精神障害当事者が社会的な立場をどのように定義し、他者と交渉して自己像を発展させているかを理解する重要な手がかりとなる。

最後に、RQ③についての考察を述べる。

(1) 障害・健常二分法（第5章）

本研究においても、語り手が障害者としての自己を構築する際に、健常者としての他者像を同時に構築している可能性が示唆された。さらに、本研究では「障害を持つ者同士は共感しやすい」というステレオタイプ的な障害者像が再生産されることで、当事者間の多様な関係性が覆い隠される可能性が示唆された。このように、障害者同士の連帯においても、単一的な規範に基づくアイデンティティ構築が当事者の多様性を限定する要因となることが確認された。

(2) 障害者間の他者化、序列化（第5章）

精神障害当事者間の他者化プロセスを分析した結果、障害者間で異なる評価基準が適用されていることが明らかになった。先行研究では、身体障害と精神障害の当事者間で異なる基準が存在することが指摘されている（マーフィー1997、秋風2008、早野2018）。本研究においては、障害者間で用いられる評価基準と、一般社会の基準の二つの側面が観察された。当事者内部の基準としては、障害者像、コミュニケーション能力、社会的理知度、ステigmaの軽減度などに基づく他者化が確認された。例えば、ステigmaの程度が軽い障害当事者ほど優位に立つ意識が見られた。また、一般社会の基準としては、教育や価値観（金銭、仕事、美的センス）に基づく序列化が発生していた。これらの基準に対し、障害を克服するロールモデルを志向する一方で、こうしたロールモデルに疑念を抱く当事者も存在していた。このような多様な基準の存在は、障害理解を二項対立の枠組みに限定する従来の構図を再考する必要性を指示するものである。他者化の基準は複雑かつ多様であり、「障害」という概念そのものが柔軟な変容と生成の余地を持つものとして再定義され得ることが示唆された。また、障害者と非障害者を取り巻く序列化や社会的規範の再生産が、ステレオタイプ的な障害者像を形成し、偏見や差別意識を助長する可能性がある点にも留意する必要がある。

(3) 障害の視認性の規範（第5、6章）

第5、6章では、「見える障害が真の障害である」という社会的規範が当事者のアイデンティティ構築に与える影響を考察した。見えない障害は外見から認識されにくく、当事者が健常者とみなされる場面が多い。この状況下で、当事者は「理解されない自己」や「健常者として扱われる自己」というアイデンティティを形成し、疎外感を抱いている。例えば、KEの語りに見られる「目に見える障害が羨ましい」という発言は、見えない障害を持つ当事者が他者から誤解され、理解を得ることが難しい現実を物語っている。Samuels (2003) は、多くの障害者論に浸透している鏡像性と目に見える差異への注目は、目に見えない障害を持っている障害者を議論の対象から外すことになると障害者論の視覚中心主義を指摘している。本研究の語りの分析から、障害者論の視覚中心主義は当事者と非当事者の障害感覚の形成とアイデンティティ構築につながるのではないかと考えられる。

(4) 自立の規範（第5、6章）

「働かなくてはならない」という自立規範も当事者のアイデンティティ形成に影響を与えている。精神疾患が原因で学業やキャリアを中断した当事者は、社会復帰を果たさねばならないというプレッシャーを抱えている。このような規範が、当事者に「社会復帰を果たすべき自己」という内面化されたアイデンティティを形成させる。

(5) 対話と相互理解の規範（第7章）

第7章では、対話を通じたアイデンティティ構築における社会的規範を検討した。特に、異質性を認める姿勢が円滑なコミュニケーションに寄与する可能性を示した点が重要である。ナラティブ・ペイスト・メディシン (Narrative-Based Medicine、以下NBM) の理念に基づき、安易な共感の試みよりも、好奇心を持って当事者の経験に耳を傾ける態度が効果的であることが確認された。NBMと本研究のインタビューは目的が異なるものの、両者ともに語り手の経験や視点を尊重し、再解釈の契機を提供する点で共通している。本研究では、語り手が自己理解を深めるプロセスを重視しており、その共感の意義は、治療目的のNBMとは一線を画している。この点を踏まえ、語り手の経験を尊重しつつ、多様な背景を理解する努力が必要であると考えられる。

論文審査の結果の要旨及び担当者

	氏名 (周氷竹)	
	(職)	氏名
論文審査担当者	主査 教授	山下 仁
	副査 教授	佐藤 彰
	副査 教授	秦 かおり

論文審査の結果の要旨

本論は、精神障害者と非障害者の間にある相互理解の欠如という現状を出発点とし、精神障害者と非障害者を巻き込んだ社会的規範を問い合わせることを最終的な目標としつつ、インタビュー調査によって得たナラティブを分析することにより精神障害者のアイデンティティの揺らぎを解明しようとしたユニークな論文である。

「差別はいけない」という社会的コンセンサスは共有されているものの、マイクロアグレッションのように、無意識のうちに差別が行われる場合も少なくない。本論は、そんな状況を踏まえ、障害当事者の日常的な言語実践の実態、その言語実践と社会文化的構造の関連、そしてその構造が日常的な言語実践によっていかに再生産されているかという問題を取り上げている。

周氷竹さんは、上記の問題を解明するため、2019年11月から2022年11月にかけて、精神障害（統合失調症、うつ病、双極性障害など）を抱えながら日本で生活する13名の当事者に対してフォローアップインタビューを含めた計16回のインタビューを実施し、彼ら・彼らのアイデンティティ構築の過程を分析した。その際、以下の3つのリサーチ・クエスチョン（RQ）を設定している。

RQ①：アイデンティティ構築に関与する言語使用はいかなるものか。RQ②：いかなるアイデンティティが構築されるか。RQ③：精神障害にはいかなる社会的規範が関与し、それがどのように再生産されるか。

分析方法は、具体的に用いられている言語表現に注目し、次に談話の構造に着目してポジショニングについて考え、同時にスマール・ストーリーの存在を確認し、最後に構造の特徴から社会的規範を推論する、というものである。その結果、RQ①の言語使用に関しては、語り手は、内在化された声や構築された対話の引用、反復、直示、前提、否定などの多様な手段を駆使し、アイデンティティを構築しながら社会的規範と交渉していることを明らかにした。RQ②のアイデンティティに関しては、Bambergの「3つのジレンマ」（同質性・異質性、能動性・受動性、連續性・非連續性）に基づいて分析し、精神障害当事者が、精神障害当事者間、家族や専門職、もしくはインタビュアーとの実際の相互行為など、それぞれの関係性によって異なるプロセスを踏まえつつ、同質性と異質性、能動性と受動性、連續性と非連續性などを調整しながら柔軟にアイデンティティを形成していることを解明した。RQ③の社会的規範に関しては、健常者を他者とすることで自分自身を障害者として構築していることから障害・健常の二分法があること、障害者間においてもコミュニケーション能力、社会的理解度、スティグマの程度に基づく他者化や序列化があること、さらには「見える障害が真の障害である」といった障害の視認性の規範、「働くなくてはならない」という自立の規範、安易な共感の試みよりも、好奇心を持って当事者の経験に耳を傾けるべきだという対話と相互理解の規範などの存在を確認した。

一般に「精神障害者」とひとくくりに語られているが、その実態は多様であり、研究者がアクセスすることが非常に難しい対象であることは否めない。しかし、周氷竹さんは自らの外国人というマイノリティとしてのアイデンティティをうまく利用して、「精神障害者」当事者の方々から貴重なデータを得ることに成功した。分析結果から導かれた考察には極めて鋭い洞察が認められる。一方、本研究を特徴づける多声（ポリフォニー）がナラティブに対話性を生み出し、アイデンティティの構築に寄与している点への言及がその重要性に比して少なく、また日本語の表現や新しい概念についての説明にやや不十分と思われる点も見受けられるが、それは本論の学術的な価値を損なうものではない。

以上の諸点から、本論が博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認める。